

(3) 池島・福万寺遺跡における

土器埋納遺構ほかの集成とその特質

山崎頼人・秋山浩三・朝田公年

1. はじめに

池島・福万寺遺跡は、河内平野の東部、東大阪市・八尾市に所在し、その周辺地域は現在も表層条里地割が良好に遺存しており「池島条里遺構」として周知されている。

当該地に総面積約40haの洪水時における遊水池「恩智川治水緑地」建設が計画され、それに先立つ発掘調査が、1981年から広大な面積で実施されている。その結果、重層的な条里型水田面、古墳時代の集落、弥生時代前期から後期にかけての小区画水田面の検出などの成果が得られている。弥生時代から現在まで水田として利用されることの多かった当遺跡では、もとより水田域からの出土遺物が少ないこともあり、広大な調査面積であるにもかかわらず遺物量は多くない。そのようななかであって、本書で報告した98-3調査区の第10面において、長径40cm、短径30cm、深さ16cmのピット状遺構から、飛鳥Ⅰ期もしくはその直前期の須恵器杯蓋が、完形で口縁を上に向け、底面に据えられた状態で、径5cm程度の石とともに出土している。本例は水田に共伴した遺構とは特定できないものであるが、当遺跡では従来から、水田面でこのようなピットや土坑に完形土器が、埋納を連想させる状態で出土する例が多くみられる。また、本例はこれまで検出されている土器埋納遺構の時期よりも若干古く、飛鳥時代の条里型水田面の初現時期を考えるにあたり興味深い事例であり、今後計画されている福万寺Ⅱ期地区¹⁾の調査にあたり留意すべきものである。

土器埋納
遺構の性格

さて、江浦洋氏は当遺跡を舞台に、このような土器埋納遺構の性格として、この種の遺構の時期とその分布が条里型水田面と密接にかかわっており、開発に先立つ地鎮めの遺構であることを明らかにし、さらに、水田開発の初現時期や画期を論じている（江浦1991、同1992、同1996、ほか）。また、弥生時代後期水田面の出土遺物に関しては井上智博氏によって、広域に検出された水田内における土器の出土状況から、水田農耕祭祀の復原が試みられている（井上1991、同1992、ほか）。

そこで今回は、上記2氏の論考に導かれながら、また今回の検出遺構の評価のためにも、池島・福万寺遺跡における現時点での土器埋納遺構の再集成を実施し、あわせて関連遺構・遺物（銭ほか）の集成を行ない、水田耕作にかかわる祭祀行為の時代的変遷をとらえ、その特質を明らかにしたい。また、水田にかかわる祭祀は一般的には不明な点が多いため、本稿での当遺跡資料の具体的呈示がもつ意味は大きいと思われる。

なお、本稿で用いる「土器埋納遺構」という語は、人為的に土器を埋納した土坑やピットをさすが、弥生時代の事例のうちには「埋納」とするに語弊のあるものも含まれており、「埋納」行為と区別できる例はひとまずは「祭祀」遺構として表記しておきたい²⁾。

祭祀遺構

2. 集成方法・基準

当遺跡における水田祭祀の時代変遷をとらえるべく、既公表資料を中心として、弥生時

表2 水田面における埋納・祭祀遺構分類表

A 大畦畔などに土器を埋納するもの	A I 大畦畔・ブロック区画畦畔	
	A II 「土器埋納遺構」	A II a 弥生時代のもの A II b 古代以降のもの
B 微高地・自然堤防・畦畔などの上に置かれたもの	B I 排水路の水口などの井堰以外の水利施設と関連したもの	
	B II 微高地・畦畔上に置かれたもの	
C 堰に関連して土器が正置されたり投棄されたりするもの	C I 取水堰(河川から導水)	
	C II 分水堰・調整堰(水路から導水)	

*なお、複数の土器からなる場合は2を後ろにつける。(ex.A II 2)

(井上1991、同1992より作成)

代から中世まで幅広く、土器埋納遺構を中心に祭祀関連遺物を出土する遺構を集成した(表3・4)。それらの認定に関しては、第一に遺構的属性から祭祀行為に共伴するとされるものの、第二に遺物的属性等から祭祀行為に関連すると想定できるものを集成の対象とした³⁾。また判然としないものについては、集成表に埋納・祭祀関連とした理由を註記した。なお、遺構的属性の分類は、井上1991、同1992に依拠して設定した(表2、図97)。

3. 水田面における埋納・祭祀遺構の様相

集成結果をもとに、検出されている水田面の時代別に概観する⁴⁾(表3、図98~100)。

〔弥生時代前期〕(図98・99) 弥生時代前期末から中期初頭の小区画水田が比較的良好な状態で検出されている⁵⁾。平坦部のみ水田として利用され、微高地状の高まり部分や沼沢状の低地部分は水田として利用されていなかった可能性がある。この面において水田祭祀にともなうとされる土器ほかが出土した遺構は18件である。遺構の内訳は、A I 類が3件、A II a 類が4件、B II 類が10件、C I 類が1件である。弥生時代前期の段階からA I 類やC I 類のものがあり、水田域全体として畦畔、堰が重要な位置を占め、それらを意識して祭祀行為が行なわれていたことがわかる。

水田面における埋納・祭祀遺構

畦畔・堰での祭祀

〔弥生時代中期〕(図98・99) 弥生時代中期の水田面は、南東から北西方向にかけての局地的な洪水によって大きく浸食を受けている部分が多いため明確な畦畔が検出されていない。あるいは、この部分は積極的な水田経営がなされなかった状況とも考えられる。これとも関係する事象と思われるが、この面において水田祭祀にともなうとされる土器ほかが出土した遺構は9件で比較的少ない。遺構の内訳は、A I 類が1件、B II 類が7件、不明が1件である。

〔弥生時代後期〕(図97~99) 弥生時代後期の水田面は、大畦畔埋納土器などから判断して後期初頭から存在し、その後の拡張や改修をへて、後期末葉の大きな洪水により埋没したものと思われる。そのため洪水堆積砂の下から、良好な状態で小区画水田を検出している。水利系統などが整然と計画性にそって造成され、集約的な水田経営を目指したことが看取される。また、この段階になると水田経営と呼応して水田祭祀にもその影響がみられ、大畦畔や水利拠点に祭祀行為をとともなうと推測される土器が集中する。遺構の内訳は、A I 類が16件、A II a 類が3件、B I 類が16件、B II 類が12件、C I 類が4件、不明が1件である。

大畦畔や水利拠点での祭祀

〔飛鳥・奈良時代〕(図98・101) 当遺跡で条里型水田が明確に展開するのは平安時代になってからであるが、飛鳥時代にさかのぼる条里地割の痕跡「南北地割A」が局所的ではあるが検出されている。ほぼ正方位の南北方向にのびる1対の畦畔と溝が検出されてお

り、また土器埋納遺構の一部がそれと連関性をもつ状態（畦畔内やそれに沿うかたち）で検出され、そのほかの土器埋納遺構の分布ともあわせて地割が推定されるにいたっている（図98-4、江浦1992、同1996）。奈良時代の遺構は、土器埋納遺構をのぞくと全く検出されていない。しかもこの時期の土器埋納遺構は9件と少なく、飛鳥時代に比べ、付近での土地に対しての積極的な働きかけが停滞している状況がうかがえる。飛鳥・奈良時代面では、弥生時代までのものと様相が変わり、水田祭祀関連の遺構は、ほとんどがいわゆる土器埋納遺構となり興味深い⁶⁾。遺構の内訳は、A I 類が2件、A II b 類が40件、その他が2件である。また、A II b 類では、埋納される土器がほとんど1点となる。

〔平安時代中期〕（図98・101） 平安時代中期になると、明確な条里地割を確認することができる。平安時代中期の条里型水田の区画は、現存の表層条里地割とは細部では異なるが、各坪内の細分方法が基本的に長地型であり、地割方向についても両者は共通している。したがって、この水田面の地割と方向が大局的には現在まで踏襲されている。この時期になると水田祭祀関連の遺構は、土器埋納遺構に加え、銅鈴や銭を埋納するものが現れる⁷⁾。銅鈴を埋納する例はこの面では確認されておらず、平安時代中期の特徴を示すものである。遺構の内訳は、A I 類が2件、A II b 類が23件、銅鈴ピットが4件、その他が4件である。

〔平安時代後期～鎌倉時代〕（図98・101） 平安時代中期面を埋没させた洪水堆積層の上面で検出される。再開発された条里型水田面は全体に平坦化が進んでいるものの、基本的には前代の地割を踏襲したものである。また、当該水田面から初現的な島畠状の高まりが検出されていることも興味深い。水田祭祀関連の遺構は、先の平安時代中期にみられた銅鈴ピットは姿を消し、あらたに獣（骨）を解体もしくは埋納した土坑が出現する。銭の埋納はひき続きみられる。遺構の内訳は、A II b 類が10件、C I 類が1件、獣骨土坑が7件である。土器埋納遺構が先の時

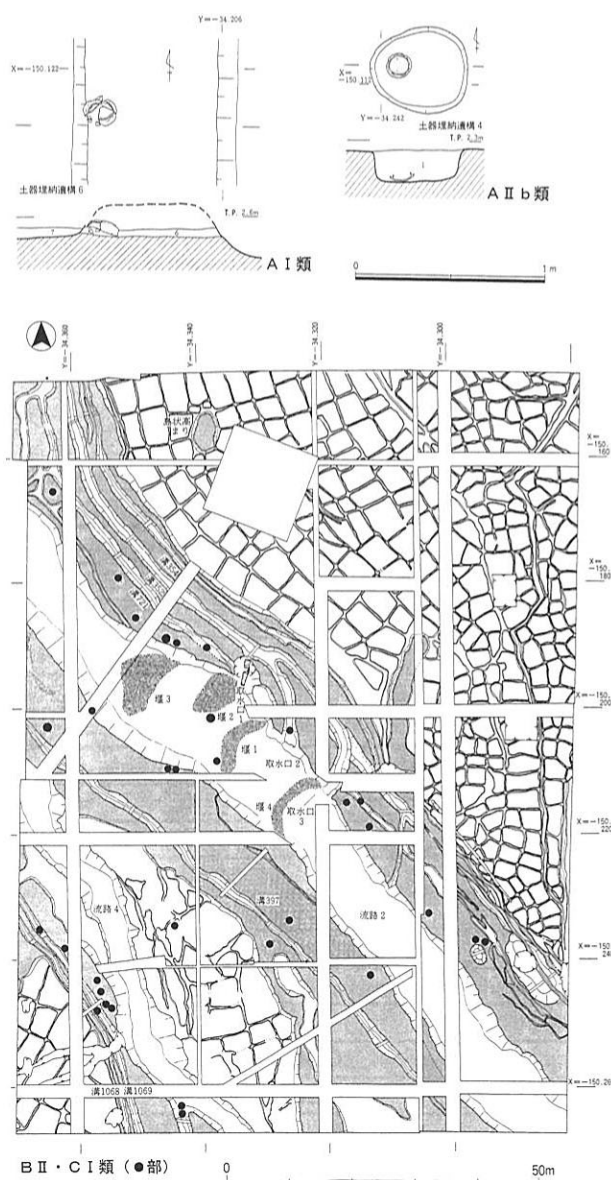
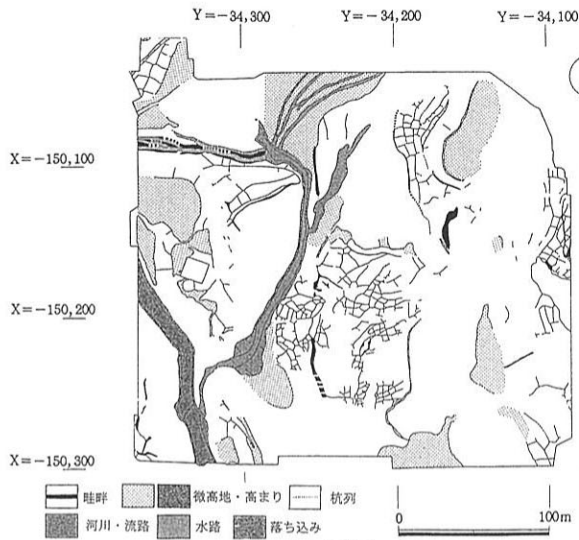
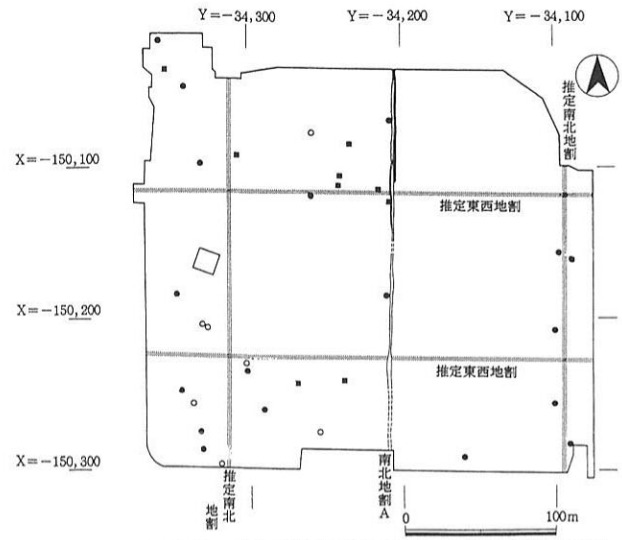


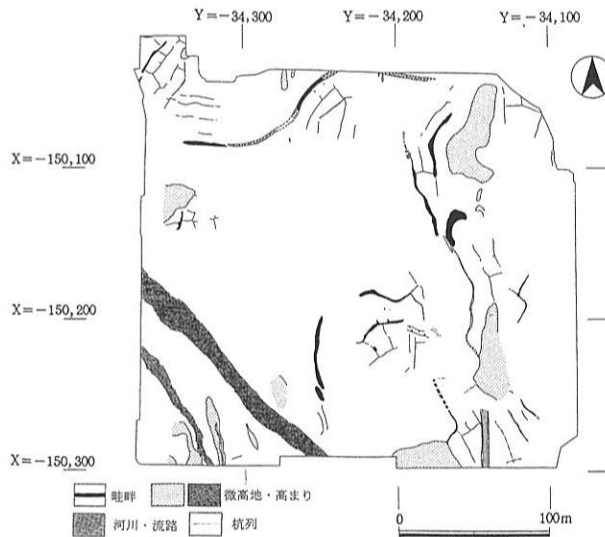
図97 埋納・祭祀遺構の分類例



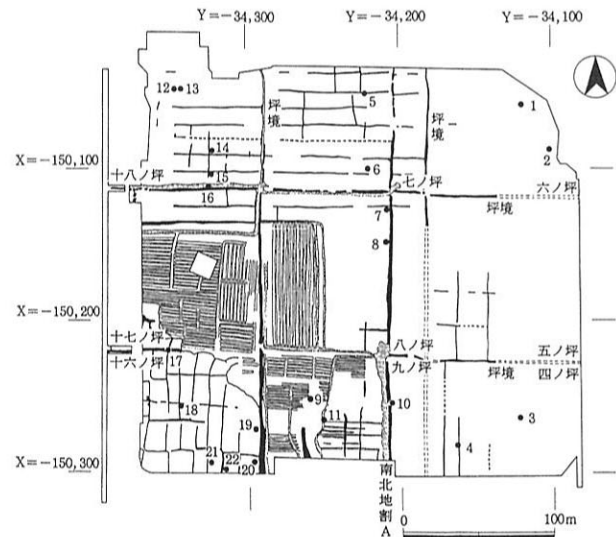
1. 弥生時代前期水田面



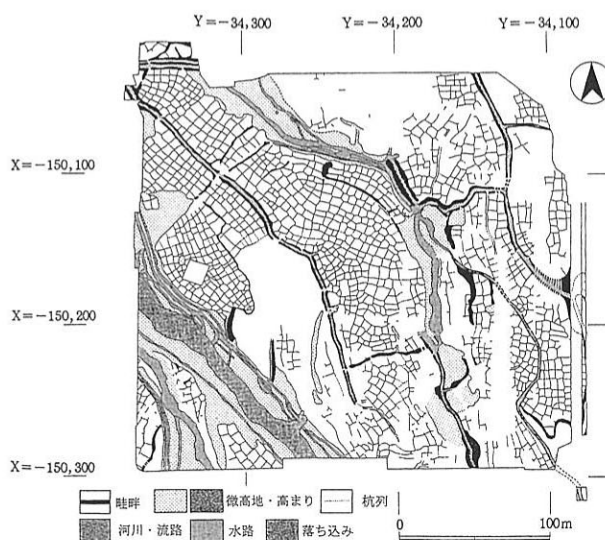
4. 飛鳥・奈良時代水田面 (●・■：飛鳥時代土師器・須恵器 ○・□：奈良時代土師器・須恵器)



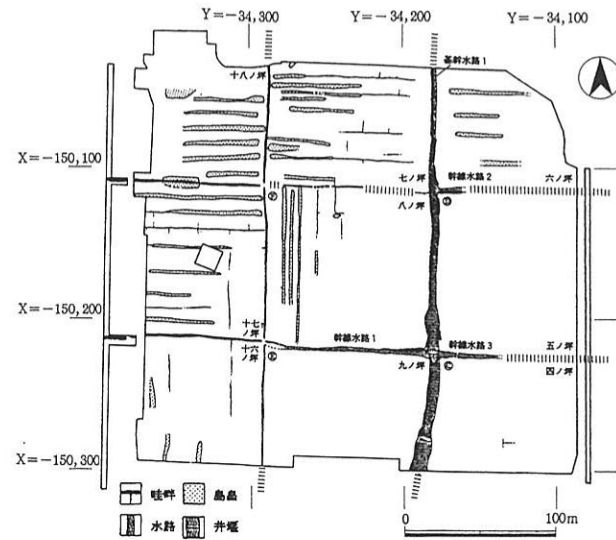
2. 弥生時代中期水田面



5. 平安時代中期水田面 (●は土器埋納遺構)



3. 弥生時代後期水田面



6. 平安時代後期から鎌倉時代水田面

(1～3：(財)大阪府文化財調査研究センター1999より作成)

(4～5：江浦1996、6：井上1995より作成)

図98 福万寺I期地区の各面における土器埋納・祭祀遺構ほか分布図

代までと比べ減少している点は注目される。

4. 埋納・祭祀遺物の様相

出土土器の
器種組成

まず、土器埋納遺構・祭祀遺構の出土土器の器種組成を中心に、当該遺構出土品における遺物的属性の特徴を抽出すべく、若干の検討を行なう。

水田域での
器種組成

〔弥生時代後期〕(図99・100・102) 弥生時代後期面は、残存状態が良く遺物量も前・中期に比べ多いので検討対象とする。まず、祭祀遺構にかぎらず水田域全体の器種組成を示す⁸⁾(図100)。水田域自体の土器出土量は集落域に比べて少なく、水田域に持ち込まれる土器のあり方は、農耕生産域での人間行動を復原するにあたり注目に値する。合計314点中、甕42%、壺19%(長頸壺8%、その他11%)、高杯15%、鉢11%、手焙り形土器3%、と続く。これは、一般集落での器種組成とさほどちがいはみられないようであるが、特徴的であるのは手焙り形土器の割合が高いということである。手焙り形土器の水田域からの出土は従来から知られている(小橋1998)ものの、水田祭祀や手焙り形土器自体の性格を考えるうえで興味深い事実である。

手焙り形
土器

埋納・祭祀
遺構での
器種組成

次に、埋納・祭祀遺構の分類別での器種組成であるが、上記の水田域全体のデータと比較すると、A I類では、甕の比率が減少しかわりに壺類、鉢の比率が増加する。B I類では、甕の比率が半数を占め特徴的である。B II類では、壺類のなかでも長頸壺が大半を占め、また手焙り形土器の比率も増加している点が注目される。C I類は、4件と少ないが、甕が多く、また器台やへら線刻をもつ広口壺、竹管文をもつ長頸壺に赤色顔料が塗布された個体など、特徴的遺物が散見できることは留意すべき点である。これらのように、弥生時代後期では遺構別の器種組成にはそれぞれ変化がみられるが、いずれも多器種にわたるところに特徴を確認することができる。

〔飛鳥・奈良時代〕(図101・102) 飛鳥・奈良時代面では、ほとんどがA II b類の遺構からの出土となる。基本的に1遺構1点の出土で、飛鳥時代のものは、土師器杯が半数

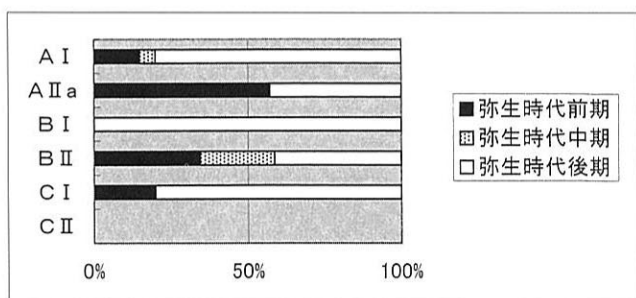


図99 遺構類型別割合 (弥生時代)

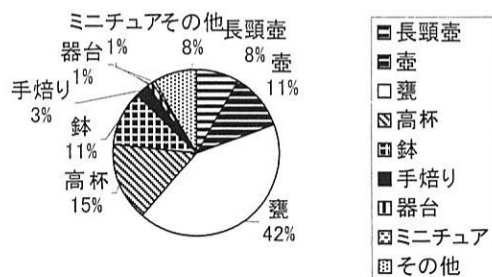


図100 器種組成 (弥生時代後期)

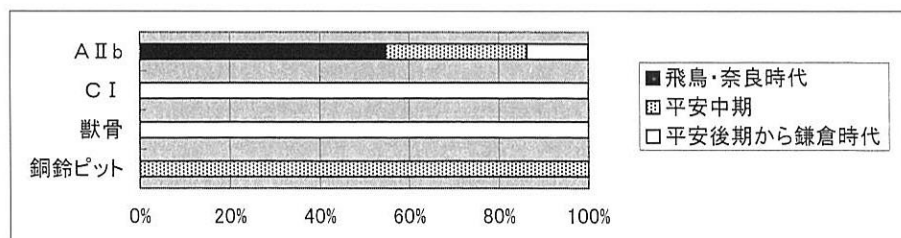


図101 遺構類型別割合 (古代以降)

以上を占め、あわせて須恵器杯、須恵器蓋が用いられる。供膳形態の個体が大半を占め、埋納の方法は須恵器蓋も口縁を上向けに埋納され、ほかのものもほとんどが正置状態で埋納される。このことから、埋納時における一定の作法が看取される。また、属性として口縁を一部打ち欠くものや内面に線刻を施すもの、土器とともに種子を埋納するものなどが見受けられる。奈良時代になると、土師器杯が半数で、そのほかでは土師器甕、同羽釜、須恵器壺など多器種が用いられ、飛鳥時代例に一般的であった供膳形態の比率が減少する。この傾向の背景に関しては、奈良時代の土器埋納遺構自体の減少とあわせて、今後、検討が必要である。また、奈良時代からは、墨書土器の埋納例が確認できるようになる。

供膳形態の器種

埋納時の作法

墨書土器

〔平安時代中期〕(図101・102) 平安時代中期面になると、再び供膳形態の器種で占められるようになり、土師器杯、土師器皿、黒色土器碗が用いられる。また、前代と同じく口縁を打ち欠くもの、線刻をもつもの、墨書が確認されるもの、あわせて種子を納めるものがみられ、ほとんどが正置状態で出土する。このことから、一定の埋納方法が存在したものと思われる。また、銅鈴や銭の埋納もみられるが、それらは土器とともに埋納されるわけではなく、単独の埋納形式をとる。

〔平安時代後期～鎌倉時代〕(図101・102) 平安時代後期から鎌倉時代面は、ひき続き供膳形態のもの、土師器皿、黒色土器碗、瓦器碗が用いられ、うち瓦器碗が8割を占める。土器類は正置状態で出土し、一部口縁を打ち欠くもの、あわせて種子を埋納するものもみられる。口縁打ち欠き等の、土器類における付加属性は前代までと比べて減少、簡略化するとともに遺構数も減少する。この時期には、銭の埋納、解体痕をとどめるものを含め獣骨を埋納した土坑がみられる。

5. 埋納・祭祀遺構の評価

各時代面ごとに、水田域における埋納・祭祀にかかわる事象を概観してきた。ここでは、それらのもつ意味を検討する。弥生時代の小区画水田段階と古代以降の条里型水田出現後

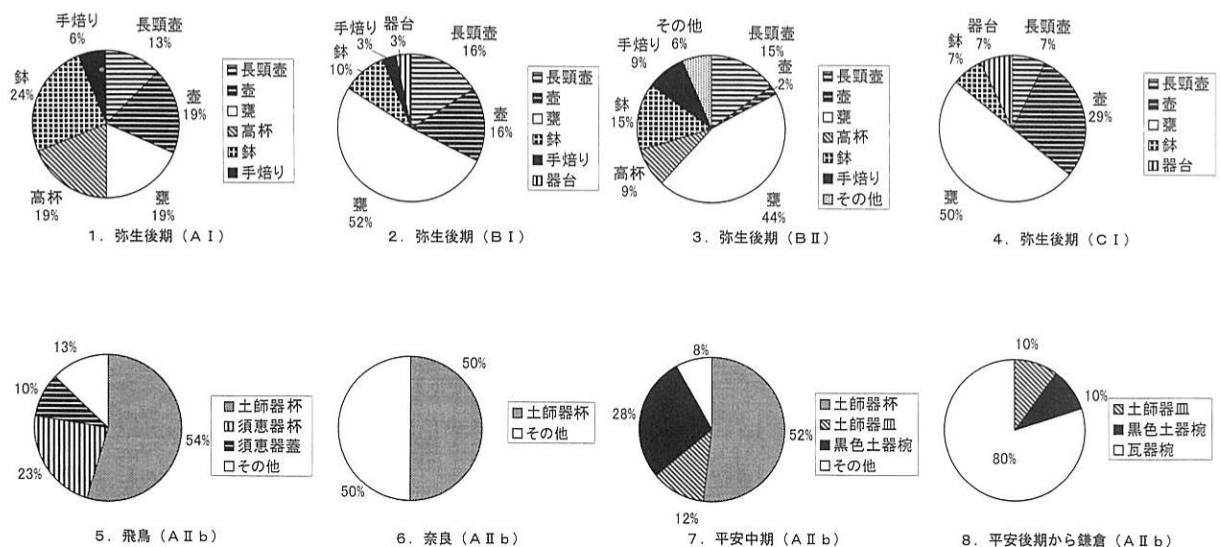


図102 類型別器種組成

の段階に大きくわけて論じたい。

A 弥生時代小区画水田 (図97～99)

当遺跡で最も残存状態の良い、弥生時代後期水田面を検討対象としたい。この遺構面は、水利系統などが整然と計画性にそって造成され、集約的な水田経営を目指したことが看取される段階である。また、大畦畔や水利拠点に祭祀行為をとまうと推測される土器の出土が集中している。すなわち、それ以前と比べて、A I 類、B I 類、C I 類が飛躍的に増加する。こういった現象は、弥生時代後期の水田祭祀形態のあり方が、水田造成技術の発展、大畦畔で囲まれた水田ブロックの明確化、あわせて複雑な取・排水のメカニズムの成立に関連したものとする、井上氏の見解に合致するものである(井上1991)。A I 類は、畦畔内に土器を埋設するもので、畦畔造成時または改修時における行為で埋設された遺構である。本類の増加は畦畔の固持を願ったものと思われ、より整備された水田区画への発展を希求したあらわれとみることができる。B I 類、C I 類については、ともに水利施設にともなうもので、水田経営にさいしての最も重要な要素に対しての祭祀行為である。こういった水口での祭祀は、水田造成時にかぎったものではなく、季節的な行為であった可能性もあろう。これらを図97(下段)で具体的にみると、流路2という取水源に対して堰が4カ所検出されている(90-1調査区)。これらは、時期差が考えられ、堰2→堰1→堰4の順(堰3は先後関係不明)となり、祭祀的行為にともなう土器類が確認されている(森本編1995)。よって、使用時だけでなく、役目を終えた後に奉納的に土器を放りこんだものである可能性もあろうか。また、この流路2によって形成された自然堤防上にも多くの土器が置かれた状況があり、さらには、流路2付近では手焙り形土器3個体以上や器台の出土、また、2個体が対になった状況での甕の出土が4カ所でみられ、特別な出土状況を呈している。加えて、竹管文をもつ個体に赤色顔料を塗布した長頸壺、また、ヘラ線刻をもつ広口壺などの存在が、その特殊性を追認させる可能性をもつ。要するに、当該期の水田の主要取水源である流路2に対する祭祀的働きかけが多く看取される。

このように弥生時代後期になると、A I 類、B I 類、C I 類が飛躍的に増加することから、当該期における、より集約的な小区画水田の経営において、整備された畦畔の維持や水源の確保に対して、当時の人々が強く注意を払っていたことがわかる。

なお、後項との関係で留意しておきたいのは、この段階では、南東から北西方向への地形的傾斜、すなわち流路方向に規制された水田造成の働きかけがみられることである。つまり、南東から北西方向の流路にそって水路が造成され、大畦畔も主にその方向に沿うかたち、もしくは直行するかたちをとっている。

B 条里型水田出現後 (図98)

土器埋納遺構の時期とその分布が条里型水田面と密接にかかわっている点、さらに、それらは開発に先立つ地鎮めの遺構である点を明らかにされ、加えて、それらから水田開発の初現時期・画期を立論された当遺跡での研究(江浦1992、同1996)があることは先にも言及した。この場合、「開発に先立つ地鎮めの遺構」から出土する土器の示す年代は、開発開始直前の時期を示すものであるといえよう。

しかし、今回の集成結果(表3)によると、各時代面内での埋納土器の時期において、

水田造成と
の関連

水口での
祭祀

赤色顔料
塗布土器
線刻土器

いくらかのばらつきがみられる傾向がある。その解釈の一案としては、開発に複数の諸段階があり、その各時期を示すものとも想定できる。しかし、当遺跡での古代の水田経営は洪水による土砂の堆積が認められない安定した地域であったと理解されている(江浦1992)ため、自然災害によって短期間に再開発をくりかえす状況は考えにくい。各時代面内での土器の時期のばらつきには別の解釈が必要となる余地がある。

例えば、飛鳥時代面(図98-4)の土器埋納遺構出土土器をみると、98-3調査区(本書報告)で検出した飛鳥Ⅰもしくはその直前期の古い時期のものから、飛鳥Ⅳ・Ⅴの新しい時期のものまで、数時期の個体が含まれる状況がある。そして、土器埋納遺構の一部が「南北地割A」や推定南北地割に沿うかたちで直線的に並ぶ現象がみられる⁹⁾。

地割に沿って存在する土器埋納遺構

次に、条里地割が明確に読みとることのできる、平安時代中期面(図98-5)と平安時代後期から鎌倉時代面(図98-6)での埋納遺構のあり方に目を転じることにする。ここでも、南北地割A付近やそのほかの大畦畔にも沿うかたちで分布している状況がひき続きみられる。しかし、ここで注目したいのは、地割内部における分布の状況であり、土器埋納を中心とした埋納遺構のすべてが、南北地割、東西地割に沿って存在するものではないということである。つまり、地割を形成する大畦畔に沿うかたちで埋納されるものと、地割内部の地点で埋納されるものとの二者が存在するということである。さらに、地割内部における埋納遺構の分布は、水田区画などの区画の交点付近に多くみられる点は重要である。

地割内部に存在する土器埋納遺構

これらのことから、飛鳥時代以降の土器埋納遺構は、一部の畦畔造成時に埋納する例のぞき、「開発に先立つ地鎮めの遺構」として一律に解釈するよりは、水田造成後での「水口」付近等における、その時々での埋納行為の産物が比較的多く含まれると解釈することができるのではないだろうか¹⁰⁾。ただし、上にみるような土器埋納遺構が南北に直線的に並ぶ事象は、あきらかに耕地区画が東西南北の正方位に変化した所産であり、また、この種の埋納遺構が条里型水田の初現時期と密接な関係性を保有していることに変わりはない。

6. おわりに

以上のような、池島・福万寺遺跡での土器埋納遺構および祭祀関係遺構の集成作業、さらにはその検討のなかで明らかにできた点は次のとおりである。

① 水田域における埋納や祭祀にともなう土器は、弥生時代から古代・中世まで存在し、水や水口に対する埋納や祭祀が重要な位置を占めていたことがわかる。

水や水口に対する祭祀

② 弥生時代においては、祭祀関連遺構の種類や祭祀関連土器器種における多様性が指摘できるのに対して、古代以降は遺構種類や埋納土器の器種に一定の選択制がみられるようになる。また、土器以外の遺物に関しては、平安時代中期にかぎり銅鈴の埋納、平安時代中期から銭の埋納の盛行、平安時代後期から鎌倉時代に獣骨出土土坑の出現が特徴としてあげられる。

埋納土器の器種選択

③ 条里地割の初現時期に関係するとされた古代以降の土器埋納遺構は、「水田開発に先立つ地鎮め」とするよりは、埋納土器の所属時期における同一水田面での非集中性や、地割内部での土器埋納遺構の分布様相から、その多くは、水田経営時における水口祭祀等に

水口祭祀にともなう土器埋納

ともなった土器埋納遺構とする評価を提示したい。しかし、その埋納遺構が南北に直線的に並ぶ事実は、条里地割と有機的な関連性をもつことには変わりはない。

これらのことをふまえ、土器埋納遺構や祭祀遺構の分布と密接に関係する、土地の利用状況について若干述べ、擧筆としたい。

弥生時代は全期を通して、南東から北西方向への地形傾斜およびその方向の流路によって、大畦畔や水路は一定の規制を受けている。そして特に弥生時代後期面では、流路やそれに沿って形成された自然堤防上に祭祀遺構の分布が多い。この地形的特徴は、ひき続き古墳時代面でも区画溝によって知ることができる。この南東から北東方向への地形区画が、真南北へと移行するのが飛鳥時代面であり、ここに土地開発の大きな画期が存在する。この画期に関して述べておくと、周辺地域ともあわせて考えるべきであるが、特に玉串川等の河川との関連は重要となつてこよう。すなわち、遺跡西部を北流する、取水源とされる玉串川のルートの確立と、排水河川の役割を果たす、遺跡内を北流する恩智川の整備などを含めた、遺跡周辺の自然地形の復原、水利系統の整備の問題は重要である(高橋1992、井上1995)。ともあれ、これらの土地利用状況における変遷や画期のあり方と、本稿でテーマとした埋納遺構や祭祀遺構との有機的関係性については、今後も一層追究していくべき課題と考えられている。

また、池島・福万寺遺跡は、広大な面積の発掘が行なわれており、その多くは整理途中の段階にある。今後、それらから生み出される各種データの増加についても、本稿での作業成果とも密接に関連させて検討し、当遺跡内のみならず河内地域における土地利用の移り変わりを、自然環境の変遷をも含めて総合的に考えていかなければならない。

〔謝辞〕 小稿の作成、集成において、水野正好先生をはじめとして、小野久隆、新倉香両氏のご援助をいただき、また1999年9月に行なった池島・福万寺遺跡「立坑勉強会」の席上では、中西靖人氏をはじめとして(財)大阪府文化財調査研究センターの池島分室の方々から有益なご教示を受けた。文末ではありますが記して感謝申し上げます。なお、本稿における関連資料集成等には標記の3名があたり、本文執筆に関しては山崎が担当し、秋山が文意を尊重しつつ除加筆を行なった。

〔註〕

- 1) 福万寺Ⅰ期地区、同Ⅱ期地区、池島Ⅰ期地区の配置に関しては本書Ⅰ・Ⅲ章を参考していただきたい。恩智川をはさんで西側が福万寺地区、東側が池島地区であり、これまで福万寺Ⅰ期地区、池島Ⅰ期地区と調査は順に進められている。
- 2) 土器埋納遺構の定義に関しては、久世1990、桜井1993にまとめられている。
- 3) この場合の遺物的属性とは、破碎、口縁部打ち欠き、胴部穿孔、赤色顔料塗布、記号文、線刻、特殊土器(手焙り形土器・ミニチュア土器・墨書土器)等をさし、また水田域では土器の出土自体が少ない傾向があるので、そのなかにみられる完形品も含めた。
- 4) 既報告例は主に福万寺Ⅰ期地区分で、池島Ⅰ期地区は現在整理中である。よって、分布図等は福万寺Ⅰ期地区側のものをを用い考察を行なう。
- 5) 福万寺Ⅰ期地区とは恩智川をはさむ東側の池島Ⅰ期地区では、近畿地方最古の弥生時代前期中頃の水田面が検出されている。現在整理中であり、その面における水田祭祀にともなう土器ほかの詳細は報告を待ちたい。
- 6) 福万寺Ⅰ期地区では古墳時代後期の集落跡が検出されているが、その面で見られる埋納・祭祀遺構は、柱抜き取り後の柱穴に土器を埋納するもの、土坑に土器を埋納するもの(AⅡb類)が多い傾向を示す。
- 7) 脱稿後(校正中)に発行された國乗・山元1998によると、95-1調査区8a面(飛鳥～奈良時代面)で和同開寶が確認されている。当遺跡での確認例は少ないものの、銭埋納の初現時期はさかのぼり、銭貨

の出現当初から埋納物として扱われた可能性が考えられる。

- 8) 弥生時代後期面の器種組成には、主に福万寺Ⅰ期地区の報告例を用いたが、手焙り形土器など一部未報告例を含めカウントした。なお、それらは現在整理中のものであり、新倉香氏のご援助を賜った。
- 9) なお、本書で報告した98-3調査区第10面の土器埋納ピット1001が、図98-4中における、東側の「推定南北地割」の南への延長線上付近にあたる事実は、注目してよいと思われる。ただし、98-3調査区第10面の遺構面としての解釈（水田面に伴伴か否か）がやや流動的であることと、同調査区と福万寺Ⅰ期地区との間は全く未調査であることから、本書ではひとまずは積極的な評価はひかえた。
- 10) 「地鎮」とは、東西南北を画し、四隅を意識して行なわれるもの、もしくは対をなすものであり、その手法は厳密に統制されていると水野正好先生から直接ご教示を受けた。それらは、水野1992ほかに詳しい。また、「水口祭」とは、「苗代田に播種した後、田の水口で行う稲作祭事。苗代祭とも。水口に土を盛り、つつじ・山吹などの季節の花や、洗米・焼米、神酒などを供えて田の神を祀り苗の成長や豊作を祈願した」（永原監修1999）ともある。

〔主要引用・参考文献〕

- 井上智博 1991 「池島・福万寺遺跡・弥生後期水田面出土遺物の検討—水田面で行われた農耕祭祀復原のために—」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅱ』 財大阪文化財センター
- 井上智博 1992 「弥生時代後期水田面をめぐる諸問題—弥生時代における水田造成技術の展開を考えるために—」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅶ』 財大阪文化財センター
- 井上智博 1995 「八尾市福万寺地区における現景観の形成過程—池島・福万寺遺跡（福万寺Ⅰ期地区）の調査から—」『大阪文化財研究』第9号 財大阪府文化財調査研究センター
- 江浦 洋 1991 「いわゆる池島条里遺構の年代について—1989年度の池島・福万寺遺跡の調査成果を中心に—」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』 財大阪文化財センター
- 江浦 洋 1992 「条里型水田面をめぐる諸問題」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅶ』 財大阪文化財センター
- 江浦 洋 1996 「古代の土地開発と地鎮め遺構」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第7集 帝京大学山梨文化財研究所
- 江浦 洋・井上智博編 1992 『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅶ』 財大阪文化財センター
- 財大阪府文化財調査研究センター 1999 「池島・福万寺遺跡ってなあに？—池島・福万寺遺跡現地公開資料—」（コピー版）
- 久世康博 1990 「平安京の埋納遺構」『考古学論集』第3集 考古学を学ぶ会
- 國乗和雄・山元 建 1998 『池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅩ』 財大阪府文化財調査研究センター
- 後藤信義 1994 「殺牛馬祭祀考」『文化財学論集』文化財学論集刊行会
- 小橋健司 1998 「手焙り土製品の研究」『史館』第30号 史館同人
- 桜井久之 1993 「長原遺跡の土器埋納遺構—飛鳥～平安時代—」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅵ』 財大阪府文化財協会
- 高橋 学 1992 「河内平野の地形環境分析Ⅲ」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅶ』 財大阪文化財センター
- 永原慶二監修 1999 『岩波日本史辞典』 岩波書店
- 深沢敦仁 1999 「水田祭祀跡に関する覚書」『考古学に学ぶ—遺構と遺物—』 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 藤田三郎 1988 「弥生時代の井戸—奈良・大阪の井戸を中心に—」『考古学と技術』 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 水野正好 1992 「「土」と地鎮と」『長岡京古文化論叢Ⅱ』 中山修一先生喜寿記念事業会
- 森本 徹編 1995 『池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅢ』 財大阪文化財センター

表3 池島・福万寺遺跡における土器埋納遺構・祭祀遺構一覧表

No.	調査区	報告時遺構名	埋納遺物	出土点数	時期	埋納状態	型式	概要 No.	備考 (報告者の埋納遺構判断材料など)
1 87-3	第16面	大畦畔601内	甕 (残存?)	1点	弥生前期	横位?	A I	府教委IV (1989)	
2 89-2	第15面		彩文付き木製高杯 (ほぼ完形)	1点	弥生前期		B II	センターI (1991)	
3 90-1	第22面	流路5内観5	木製小容量器 (破損)、石弁	2点	弥生前期		C II	センターX II (1995)	
4 90-3 (91)	第15面	土器1 大畦畔3内	甕 (上半)	1点	弥生前期	意図的に体部で分割され、口縁部打ち欠き	A I	センターVII (1992)	
5 90-3 (91)	第15面	土器2 Bブロック南東区画畦畔盛土上面	甕 (完形に近かった、現状は体部以下のみ)	1点	弥生前期	正置	A I	センターVII (1992)	
7 90-3 (91)	第15面下洪水砂 (前期)		甕 (ほぼ完形)	1点	弥生前期	正置か	B IIか	センターVII (1992)	「洪水砂の中でもラミナの状況が変わる層面に存在している→人為的に置かれた可能性も」
8 90-3 (92)	第15-b面	土坑3	甕 (1個体分)、甕口縁、石鏝、チャート片	3点他	弥生前期	中位・破砕・正置	A IIa2	センターX I (1995)	「甕上半を正置、その上層に壺下半を破砕」
9 90-3 (92)	第15-b面	土器群	甕 (4個体、1個体はほぼ完形)	7点	弥生中期初頭	廃棄	B IIか	センターX I (1995)	
10 90-3 (92)	第15-b面	土坑1	<上・下層>炭化米 (完形327、欠損322) <埋土下層>大形鉢 (上半) (黒色漆塗物)		弥生中期初頭		A IIa2	センターX I (1995)	
11 90-3 (92)	第15-b面	落ち込み1	炭化米 (完形490、破損367) 甕口縁破片数点		弥生前期		A IIa2か	センターX I (1995)	
12 90-3 (92)	第15-b面	本路11東側大畦畔の北端付近	内面朱付着土器他		弥生前期		B IIか	センターX I (1995)	
13 90-3 (92)	第15-b面	大畦畔11上	甕 (ほぼ完形か)	1点	弥生中期初頭	横置	B II	センターX I (1995)	
14 90-3 (92)	第15-b面	大畦畔11上	甕 (下半)	1点	弥生中期初頭	横置	B II	センターX I (1995)	
15 93-2	弥生時代1面	D区第16面ピット246	ヒョウタンの類	1点	弥生前期末～中前期初頭	横位・ひしゃげた状態	A IIa	センターXVI (1995)	「弥生時代5面ピット304は下部遺構 (同一)」
16 95-3	第12a面		甕 (完形)	1点	弥生前期		B II	大文研XIX (1998)	「意図的に据え置いた状況を想起 底部穿孔」
17 95-3	第12a面		甕底部	1点	弥生前期	破片になっており?	B II	大文研XIX (1998)	「意図的に据え置いた状況を想起」
18 95-3	第12a面		甕 (ほぼ完形)	1点	弥生前期		B II	大文研XIX (1998)	「底部穿孔か」
19 95-3	第12a面		甕底部	1点	弥生前期		B II	大文研XIX (1998)	
20 1トト越流堤部 (その1)	第5面	大畦畔上	甕 (上半・生駒西麓産)、無頭蓋 (上半・生駒西麓産)	2点	弥生中期末?	?	B II	府教委II (1986)	「盛土内ではなく、盛土上」
21 86-3	第5面	河川501	甕 (上半、下半)・甕 (下半部片)・鋤等	4点他	弥生中期			府教委III (1988)	破砕片は数10点
22 90-2	第16面	大畦畔18上	甕 (上半)	1点	弥生中期	?	B II	センターVI (1991)	
23 90-2	第16面	杭群1	甕底部	1点	弥生中期		A Iか	センターVI (1991)	「大畦畔に伴うだろう杭群、盛土は洪水により浸食」
24 90-3 (90)	第14面	島状高まり	無頭蓋 (ほぼ完形?・生駒西麓産)	1点	弥生中期	正置	B II	センターII (1991)	
25 90-3 (92)	第14面	大畦畔1直上	台付無頭蓋片、甕口縁、甕底部3	5点	弥生中期	正置	B II	センターX I (1995)	「甕底部が正置された・・・大畦畔の上に置かれた」
26 90-3 (92)	第14面	調査区南側高まり	甕 (下半)	1点	弥生中期		B II	センターX I (1995)	「1～5とは別個、埋納?」
27 92-1	第13面	土器集中	甕底部、甕 (完形3・生駒西麓産)	4点	弥生中期	壺・甕2正置、壺1横位	B II	センターXIII (1993)	「壺内面に一部赤色顔料」
28 93-2	弥生時代5面	A区第14面上層	甕 (ほぼ完形)	1点	弥生中期	横位	B II	センターXVI (1995)	面上ではほぼ完形のため抽出 cf. p9458-2 層中出土分
29 1トト越流堤部 (その1)	第4・5面	河川1	長頸蓋 (ほぼ完形、生駒西麓産)、甕 (ほぼ完形)、付	2点他	弥生後期			府教委II (1986)	「壺口縁一部打ち欠き、長頸蓋破砕」
30 86-4	第6面	溝601	甕 (完形2点、上半1点)	3点	弥生後期			府教委III (1988)	
31 87-1	第4面	溝402	各種 (手焙り形土器含)	多数	弥生後期～庄内期			府教委III (1988)	
32 87-2	第15面	大畦畔1503内	鉢 (体部1/2欠損)		弥生後期	正置?	A I	府教委IV (1989)	
33 89-2	第13面	南西側高地 (自然堤防)	甕 (6個体)・鉢・甕か鉢の底部3	10点	弥生後期		B II	センターI (1991)	
34 89-3	第12-2面	自然堤防上	甕 (上半)・長頸蓋 (上半)・鉢・小鉢・高杯	5点	弥生後期		B II	センターII (1991)	
35 89-3	第12-2面か		手焙り形土器 (一部欠)	1点	弥生後期		B IIか	センターI (1991)	

No.	調査区	報告時遺構名	報告時遺構名	理窟遺物	出土点数	時期	埋跡状態	理窟類型	概要 No.	備考(報告者の埋跡遺構判断材料など)
36	90-1 (90-92)	第18面	流路2堤防	<堤防上> 甕8、長頸甕5、鉢3、高杯1、手焙り 型土器3以上、他	弥生後期			BII	センター-XII (1995)	<堤防上> 完形に近いものが多い、2個体付(2)、甕スズ類著・内面コグ有りも
37	90-1 (90-92)	第18面	流路4堤防	<堤防上> 甕8、長頸甕5、鉢3、高杯1、手焙り 型土器3以上、他	弥生後期			BII	センター-XII (1995)	<堤防上> 完形に近いものが多い、2個体付(2)、甕スズ類著・内面コグ有りも
38	90-1 (90-92)	第18面	流路2内堀1	<流路> 甕7、広口甕4、長頸甕、鉢、碗、器台、 他、広鉢	弥生後期			C1	センター-XII (1995)	<流路> 完形に近いものが多い、2個体付(1)、甕/内系甕口縁・甕、ヘラ線刻甕、竹 管文赤色顔料長頸甕
39	90-1 (90-92)	第18面	流路2内堀2	<流路> 甕7、広口甕4、長頸甕、鉢、碗、器台、 他、広鉢	弥生後期			C1	センター-XII (1995)	<流路> 完形に近いものが多い、2個体付(1)、甕/内系甕口縁・甕、ヘラ線刻甕、竹 管文赤色顔料長頸甕
40	90-1 (90-92)	第18面	流路2内堀4	泥除(破損)、盾(破損)	弥生後期			C1	センター-XII (1995)	<流路> 完形に近いものが多い、2個体付(1)、甕/内系甕口縁・甕、ヘラ線刻甕、竹 管文赤色顔料長頸甕
41	90-1 (90-92)	第18面	流路2取水口2付近	<流路> 甕7、広口甕4、長頸甕、鉢、碗、器台、 他、広鉢	弥生後期			C1	センター-XII (1995)	<流路> 完形に近いものが多い、2個体付(1)、甕/内系甕口縁・甕、ヘラ線刻甕、竹 管文赤色顔料長頸甕
42	90-1 (90-92)	第18面	流路4	<流路> 甕7、広口甕4、長頸甕、鉢、碗、器台、 他、広鉢	弥生後期			B1	センター-XII (1995)	<流路> 完形に近いものが多い、2個体付(1)
43	90-1 (90-92)	第18面	溝352	<水路> 甕2、長頸甕2	弥生後期			B1	センター-XII (1995)	<水路> 完形に近いものが多い、2個体付(1)
44	90-1 (90-92)	第18面	溝721	<水路> 甕2、長頸甕2	弥生後期			B1	センター-XII (1995)	<水路> 完形に近いものが多い、2個体付(1)
45	90-1 (90-92)	第18面	溝1069	<水路> 甕2、長頸甕2	弥生後期			B1	センター-XII (1995)	<水路> 完形に近いものが多い、2個体付(1)
46	90-2 (H4)	第14-1面	大畦畔45直上	長頸甕(線1/2)に半裁、2個体	弥生後期		正置？(底部は正置)	A1	センター-X (1995)	「もととは正置か」
47	90-3 (90)	第13面	水口11	甕(残存率？)	弥生後期		1.点大畦畔直上で原状 置、他2点は落込み	B1	センター-II (1991)	「水口祭祀」
48	90-3 (90)	第13面	水路5東側大畦畔盛土内	甕(ほぼ完形)	弥生後期			A1	センター-II (1991)	「口縁部から頸部にかけて人為的打欠」
49	90-3 (90)	第13面	溝	長頸甕(ほぼ完形？)	弥生後期		細かく破砕	B1	センター-II (1991)	「内部内面を除く部分に赤色顔料、胴部から底部にかけ焼成後穿孔」
50	90-3 (90)	第13面	D-F間大畦畔盛土中(脚) + 水田D-26畔土中(杯)	高杯(脚と杯・生駒西麓産)	弥生IV-V	？		A1	センター-II (1991)	
51	90-3 (90)	第13面	水路5目部大畦畔盛土中	台付無頸甕(脚部1/4以下・生駒西麓産)	弥生IV-V	？		A1	センター-II (1991)	
52	90-3 (90)	第14面	大畦畔4 遺構列部分(水口 か)	大甕甕口縁部片(図化しない)	弥生後期		破砕	B1	センター-II (1991)	「埋跡か」
53	90-3 (90)	第14面	小区画水田D-8北東隅(水 田面を覆う粘土層中)	甕(上半・生駒西麓産)	弥生後期			BIIか	センター-II (1991)	「埋跡か」
54	90-3 (91)	第13面	土器9 水路3に伴う大畦畔 の盛土内	甕胴部、手焙り形土器破片	弥生後期		胴部の部分を半裁し、伏 せた状態	A1	センター-VII (1992)	「手焙り形土器は、埋跡列部に破砕して甕の周囲に置いた可能性」
55	90-3 (91)	第13面	土器10 水路3に伴う大畦畔 の盛土内	高杯(完形・生駒西麓産)と甕胴部	弥生後期		甕の胴部をドーナツ状に 分割して置き、内に高杯	A1	センター-VII (1992)	
56	90-3 (91)	第13面	土器11 水田遺構1脇	手焙り形土器(下半・生駒西麓産)	弥生後期		正置	B1	センター-VII (1992)	
57	90-3 (91)	第13面	土器12 水路3に伴う大畦畔 の盛土内	細頸甕(遺存悪く取り上げ不可能、有孔縁・完形？)	弥生後期		細頸甕とそれを塞ぐ有孔 鉢	A1	センター-VII (1992)	「井上1991ではBタイプとしているが1992でAと訂正」
58	90-3 (91)	第13面	土器13 甕7の脇にあたる大 畦畔上の盛土内	鉢(完形？)	弥生後期		正置	A1	センター-VII (1992)	
59	90-3 (91)	第13面	土器・木製品14 水路3底面	甕の底部片(生駒西麓産)、木製品	弥生後期			B1	センター-VII (1992)	
60	90-3 (91)	第13面	土器・木製品15 水路3底面	小形広口甕(完形・生駒西麓産)、鉢(下半・生駒 西麓産)、瓶3本	弥生後期			B1	センター-VII (1992)	「井上1991の分類ではCタイプ」 「大畦畔上にあったものが転落」
61	90-3 (91)	第13面	土器16 水路5の東側大畦畔 の脇	鉢(完形？・生駒西麓産)	弥生後期			BII	センター-VII (1992)	「本来大畦畔上」
62	90-3 (91)	第13面	土器17 J・Mアロック間大 畦畔盛土内	甕底部(生駒西麓産含)	弥生後期	？		A1	センター-VII (1992)	
63	90-3 (92)	第13面	No.26-1 (水口40付近)	甕底部	弥生後期			B1	センター-XI (1995)	
64	90-3 (92)	第13面	No.26-2 (南西隅高まり)	甕底部	弥生後期			BII	センター-XI (1995)	
65	90-3 (92)	第13面	No.27 (大畦畔脇)	鉢(下半？)	弥生後期		？	B1	センター-XI (1995)	「大畦畔上に置かれていたのが転落した可能性」
66	90-3 (92)	第13面	No.28 (水路4右岸の水口41 付近の大畦畔内)	鉢(完形？)	弥生後期		盛土直下 斜位	A1	センター-XI (1995)	外面スズ
67	90-3 (92)	第13面	No.29 (水路4底面)	甕(下半)、炭化板材	弥生後期			B1	センター-XI (1995)	
68	90-3 (92)	第13面	No.30 (大畦畔内)	甕(口縁部文出)	弥生後期		大畦畔盛土直下正置	A1	センター-XI (1995)	
69	90-3 (92)	第13面	No.31・32 (大畦畔上高まり盛 土内)	高杯(軸部)	弥生後期	？		A1	センター-XI (1995)	「埋跡したものではない？」
70	90-3 (92)	第13面	No.33 (水路4埋土上部)	木製品(鉄・泥除・柄)	弥生後期			B1	センター-XI (1995)	「同一個体か」

No.	調査区	報告時遺構面	報告時遺構名	埋跡遺物	出土品数	時期	埋跡状態	埋跡型式	調査No.	備考(報告者の埋跡遺構判断材料など)
71	90-3 (92)	第13面	No.34 (水路4左岸の大畦畔内)	高杯 (ほぼ完形)	1点	弥生後期	正置か	A1	センターX-I (1993)	「軸部が明らかに盛土内→正置か」
72	92-1	第9面	畦畔に伴う溝	壘 (生駒西前産)、小形尖頭壘、その他		弥生後期		BHカ	センターX-III (1993)	
73	92-2	第9面	畦畔内	土器片		弥生後期	?	A1	センターX-III (1993)	「陪葬著しく不明」
74	93-1	第10-1面	土坑11	壘体部(50% 口縁なし)、ウリ科種子22以上	1点他	弥生後期	横位	A1a	大文研XV (1997)	「輸入品か、中〜東部瀬戸内」
75	93-1	第10-1面	水路1×畦畔脇	細頸壘 (頸部)・壘・壘2・底部など	数点	弥生後期	横位	A1カ	大文研XV (1997)	「もとは盛土内か」
76	93-1	第10-1面	水口3北側大畦畔畔み部	壘底部、高杯杯部など	数点	弥生後期	?	BH	大文研XV (1997)	
77	93-1	第10-1面	区画小畦畔畔近微高地	壘底部2、高杯脚部など	数点	弥生後期		BH	大文研XV (1997)	
78	93-1	第10-2面	溝6	各種土器 (尖頭壘・高杯・壘中心)	100個体以上	弥生後期	底部を上にして	B1カ	大文研XV (1997)	詳細は別途検討
79	93-2	弥生時代1面	D区第3面ビット225	鉢 (完形?)	1点	弥生後期		A1a	大文研XVI (1995)	「疑い縁かも」
80	93-2	弥生時代1面	A区第2面溝26	長頸壘 (ほぼ完形)	1点	弥生後期		B1	大文研XVI (1995)	ほぼ完形により抽出
81	93-2	弥生時代2面	D区第4面土器	壘D (ほぼ完形)	1点	弥生後期	横位	BH	大文研XVI (1995)	
82	96-2	第10面	くぼみ4	各種 (手廻り型土器含む)	複数	弥生後期		A1a2	大文研XIII (1997)	
83	Iトレ越流堤部(その1)	第4面	溝状遺構2	壘 (上半)	1点	布留			府教委II (1986)	
84	90-1 (90-92)	第16-2面	土器埋納遺構3	土器器蓋 (ほぼ完形か)	1点	庄内終末から布留の初め	上位・正置か	A1b	センターX-II (1993)	「口縁の3/4程度のみ正位置…、他の破片を西よりに重ね…」
85	90-1 (90-92)	第16-2面	土器埋納遺構10	土器器蓋3・壘1 (残存?)、石、壘1点以外は上半部のみ	4点他	庄内	中位	A1b2	センターX-II (1993)	「口縁部を意識した埋納、壘は赤色顔料塗布」
86	92-5	第12面		小型丸底壘 (完形)	1点	布留	横位		センターX-III (1993)	
87	96-2	第9面	土坑6	下直口縁短口縁、高杯 (ほぼ完形)、庄内壘 (完形、下直)	4点	庄内	高杯 (中位・斜位)、庄内壘 (下位・斜位)	A1b2	大文研XIII (1997)	
88	96-2	第9面	土坑8	庄内壘口縁、壘口縁、壘上半、壘完形、炭化木片	4点	庄内	上位、潰れた状態	A1b2	大文研XIII (1997)	
89	96-2	第9面	くぼみ3	各種 (ミニチュア土器含む)	複数	庄内		A1b2	大文研XIII (1997)	
90	90-1 (90-92)	第16-2面	建物4柱穴 (統一名称 建物跡14)	須臾器蓋 (口縁部欠損)	1点	TK23	中位・正置 (柱抜取後)	A1b	センターX-II (1993)	
91	90-1 (90-92)	第16-2面	建物8柱穴 (統一名称 建物跡18)	須臾器杯蓋 (完形)	1点	MT15	斜位 (柱抜取後)	A1b	センターX-II (1993)	
92	90-1 (90-92)	第16-2面	建物15ピット (統一名称 建物跡23)	須臾器杯 (約1/2残存)	1点	TK10		A1b	センターX-II (1993)	
93	90-1 (90-92)	第16-2面	建物16(統一名称 建物跡24)	須臾器杯蓋 (完形)	1点	MT15		A1b	センターX-II (1993)	「土層観察の前提により柱穴の大半が欠けられる。埋納に伴うか」
94	90-1 (90-92)	第16-2面	土器集積遺構	須臾器杯蓋3個体 有蓋高杯4個体 杯身8個体 土器器蓋1個体	18個体	TK23・47			センターX-II (1993)	「欠損するものも多い反面、完形のものも含まれており、単なる廃棄ではない」
95	90-1 (90-92)	第16-2面	土坑209	須臾器杯身2・蓋3 土器器杯3 (完形含む) 壘の残片3点等	8点他	TK13と飛鳥II2区画	上位が多い	A1b2	センターX-II (1993)	「井戸か (湧水なし)」
96	90-1 (90-92)	第16-2面	土器埋納遺構4	土器器蓋破片	1点	古墳時代後期	底面・横位か	A1b	センターX-II (1993)	
97	90-1 (90-92)	第16-2面	土器埋納遺構6	土器器蓋 (ほぼ完形)、須臾器杯身片他	2点他	古墳時代後期	中位か・横位	A1b2	センターX-II (1993)	「壘の口縁部2ヶ所欠損→埋納遺構か」
98	90-1 (90-92)	第16-2面	土器埋納遺構9	土器器蓋 (完形)ノ<内容物>滑石白玉9、有孔板1	1点他	古墳時代後期	底面・斜位	A1b	センターX-II (1993)	
99	90-1 (90-92)	第16-2面	土坑133	須臾器蓋 (残存?)、白玉172点 (内線内2)、有孔板9	1点他	古墳時代後期	底面	A1b	センターX-II (1993)	図面1/600のため詳細不明
100	90-1 (90-92)	第16-2面	耳環ピット	金銅製耳環	1点	古墳時代後期			センターX-II (1993)	図面1/600のため詳細不明
101	90-3 (90)	第12面	柱穴12	須臾器杯蓋片(2/3、2点・1/2、1/3)、ウリ科種子5点	5点他	MT15〜TK10	中位・横位 (2点は重ねた状態)	A1b2	センター-II (1991)	「1点は柱穴2のものとの接合」
102	90-3 (90)	第12面	柱穴13	土器器蓋か小形壘の底部片	1点	古墳時代	中位・正置 (柱抜取後)	A1b	センター-II (1991)	
103	90-3 (90)	第12面	柱穴14	砥石	1点	古墳時代		A1b	センター-II (1991)	
104	90-3 (90)	第12面	土坑222	須臾器器体部	1点	古墳時代	中位・横位	A1b	センター-II (1991)	「水溜か・埋土から」
105	91-2	第10面	土坑2	破鏡、近江系土器口縁部、桃種核2	2点他	古墳時代			センターIX (1992)	

No.	調査区	報告時遺構面	報告時遺構名	理納遺物	出土点数	時期	埋没状態	理納型	概要 No.	備考 (報告者の埋納遺構判断材料など)
106	96-2	第9面	土坑7	須恵器杯身 (残存?)	1点	MT15		A1b	大文研XXIII (1997)	
107	1トトレ越流堤部 (その1)	第4面 (上面?)	Pt 1	土師器杯C (完形)	1点	飛鳥III	中位・正置	A1b	府教委II (1986)	
108	1トトレ越流堤部 (その1)	第4面 (上面?)	Pt 2	土師器杯C (完形)	1点	飛鳥II・III	底面・斜位	A1b	府教委II (1986)	
109	1トトレ越流堤部 (その1)	第4面 (上面?)	Pt 3	土師器杯C (ほぼ完形)	1点	飛鳥II・III	中位・正置	A1b	府教委II (1986)	「口縁一部打欠か」
110	86-1	第8面	土坑8022	土師器杯A (完形)	1点	飛鳥III	中位・正置	A1b	府教委III (1988)	
111	86-1	第8面	土坑8024	土師器杯D (完形)	1点	飛鳥III	底面・正置	A1b	府教委III (1988)	
112	86-1	第8面	土坑8043	土師器杯C (完形)	1点	飛鳥II	中位・正置	A1b	府教委III (1988)	
113	86-1	第8面	土坑8873	土師器杯蓋 (完形)	1点	飛鳥III	中位・逆斜位	A1b	府教委III (1988)	「体部下半焼成後穿孔か」
114	86-1	第8面	土坑8875	須恵器杯H (完形)	1点	飛鳥II	中位・正置	A1b	府教委III (1988)	
115	86-3	第3-2面	Pt 3-201	須恵器杯口蓋 (口縁部)	1点	8世紀代		A1b	府教委III (1988)	「中国地方系」
116	86-3	第3-2面	Pt 3-202	土師器杯C (1/3か)	1点	飛鳥II・III		A1b	府教委III (1988)	
117	87-3	第12面	溝1203	土師器蓋 (ほぼ完形)	1点	古代 (実測図なし)	横位	A1b	府教委IV (1989)	
118	89-1	第9面	土器埋納ピット1	土師器杯C (ほぼ完形)	1点	飛鳥III	埋土中位・正置	A1b	センターI (1991)	
119	89-3	第11-1面	溝37	土師器蓋 (下半)	1点	奈良時代	横置後正置	A1b	センターI (1991)	
120	89-3	第11-1面	土坑42	羽釜 (底面周刃欠)	1点	7世紀末頃	底面・逆斜位	A1b	センターI (1991)	
121	89-3	第11-1面	土坑33	土師器蓋 (上半)	1点	6世紀末頃	底面・横位	A1b	センターI (1991)	
122	89-3	第11-1面	土坑35	須恵器杯蓋 (ほぼ完形)	1点	飛鳥IV・V	底面・逆位	A1b	センターI (1991)	「口縁一部打欠」
123	89-3	第11-1面	ピット88	須恵器杯H (ほぼ完形)	1点	飛鳥II	底面・やや斜位	A1b	センターI (1991)	口縁一部打欠有か
124	90-1 (90~92)	第16-2面	建物10柱穴 (統一名称 建物跡20)	土師器杯C (ほぼ完形)	1点	飛鳥II・III	中位・正置 (柱抜取後)	A1b	センターXII (1995)	口縁一部打欠有か
125	90-1 (90~92)	第16-2面	土器埋納遺構1	土師器杯C (完形)	1点	飛鳥III	底面・正置	A1b	センターXII (1995)	
126	90-1 (90~92)	第16-2面	土器埋納遺構2	土師器杯C (完形)	1点	飛鳥III	底面・正置	A1b	センターXII (1995)	「内面に焼成後線刻」
127	90-1 (90~92)	第16-2面	土器埋納遺構5	土師器杯C、碗C、羽釜 (完形品なし)	4点	平城II	中位	A1b	センターXII (1995)	「周囲の状況から、は単なる廃棄土坑とも考えがたい」
128	90-1 (90~92)	第16-2面	土器埋納遺構7	土師器杯A (ほぼ完形)	1点	平城II	中位・正置	A1b	センターXII (1995)	
129	90-1 (90~92)	第16-2面	土器埋納遺構8	土師器杯 (半分以下残存)	1点	平城II~III	中位・斜位	A1b	センターXII (1995)	
130	90-1 (90~92)	第16-2面	土器埋納遺構11	土師器杯C (完形)	1点	飛鳥III	底面・逆位	A1b	センターXII (1995)	
131	90-1 (90~92)	第16-2面	土器埋納遺構12	土師器鍋 (約1/4)	1点	奈良時代後半	中位・横位	A1b	センターXII (1995)	
132	90-1 (90~92)	第16-2面	土器埋納遺構14	土師器杯A (4/5残存)	1点	奈良時代前半	底面・正置	A1b	センターXII (1995)	
133	90-2 (H 3)	第13-0面	ピット613	土師器杯C (完形)	1点	飛鳥III	底面・正置	A1b	センターVI (1991)	「外底面に「華」と書書」
134	90-2 (H 3)	第13-1面	ピット614	土師器杯A (完形)	1点	奈良時代初期	底面・正置	A1b	センターVI (1991)	口縁一部打欠有か
135	90-3 (90)	第12面	土器埋納ピット3	土師器杯C (ほぼ完形)	1点	飛鳥III	底面・逆位	A1b	センターII (1991)	
136	90-3 (90)	第12面	土器埋納ピット4	須恵器杯身H (完形)	1点	飛鳥IV・V	底面・正置	A1b	センターII (1991)	
137	90-3 (91)	第12-1面	土器埋納遺構3	須恵器杯蓋 (完形)	1点	飛鳥II	底面・逆位	A1b	センターVII (1992)	
138	90-3 (91)	第12-1面	土器埋納遺構4	須恵器杯H (完形)	1点	飛鳥II	底面・正置	A1b	センターVII (1992)	
139	90-3 (91)	第12-1面	土器埋納遺構5	小型の土師器蓋、ウリ科種子3	1点他	飛鳥IV・V	斜位・中位	A1b	センターVII (1992)	「ウリ科種子は、墓内部及び口縁部付近外部」
140	90-3 (91)	第12-1面	土器埋納遺構6	須恵器杯B (完形)	1点	飛鳥IV・V	逆置	A1	センターVII (1992)	「能軒の盛土中と判断」

No.	調査区	報告時遺構面	報告時遺構名	埋納遺物	出土点数	時期	埋納状態	埋納類型	概要 No.	備考 (報告者の埋納遺構判断材料など)
141	90-3 (91)	第12-1面	土器埋納遺構7	須恵器杯B (完形)	1点	飛鳥IV・V	底面・逆置	AHb	センターVII (1992)	
142	90-3 (91)	第12-1面	土器埋納遺構8	須恵器杯A (口縁1/5を欠く)	1点	飛鳥IV・V	底面・正置	AHb	センターVII (1992)	
143	90-6	第8面		土師器杯C (完形品)		飛鳥II	正置	AHb	センターII (1991)	掘り方不明、内面焼成後に6角形の緑刻
144	92-1	第8面か	坪境畦畔	土師器杯A (ほぼ完形)	1点	平城III	正置	A I	センターXIII (1993)	口縁一部打欠、底部に墨書「新」
145	92-4	第7面		土師器杯C (残存?)	1点	飛鳥II・III		AHb	センターXIII (1993)	「土器埋納との関連か」
146	92-7		土器埋納ビットb	土師器杯A (残存?)	1点	平城II	底面・正位	AHb	未報告	江浦 [1996] より
147	92-7		土器埋納ビットc	土師器杯C (ほぼ完形)	1点	飛鳥III	中位・正位	AHb	未報告	「口縁一部打欠」、江浦 [1996] より
148	92-7		P215	土師器把手付碗 (ほぼ完形)、縄段1	1点他	飛鳥III	中位・正位	AHb	未報告	「把手先端を欠く・碗の中に線刻」、江浦 [1996] より
149	93-1	第9面か	土器埋納遺構5	土師器杯C (併せて完形)	2点	飛鳥IV・V	底面・破片を重ねて正位	AHb	大文研XV (1997)	
150	98-3	第10面	土器埋納ビット1001	須恵器杯蓋、石	2点	飛鳥I	底側面・逆位	AHb	本報告	
151	86-3	第3-2面	Pr 3-201	須恵器口縁 (口縁部)	1点	8世紀代		AHb	府教委III (1988)	「中国地方系」
152	87-3	第12面	溝1205	土師器皿A (1/2か)	1点	11世紀			府教委IV (1989)	
153	89-1	第7面か		黒色土器A類碗 (ほぼ完形)	1点	10世紀前半		AHb	センターI (1991)	「土器埋納ビットの可能性」
154	89-1	第9面	土器埋納ビット2	土師器杯C (ほぼ完形)	1点	10世紀前半	底面・正置	AHb	センターI (1991)	
155	89-2	第11面	九ノ坪の南北地帯Aとした畦畔盛土中	銅鈴 (完形)	1点	10世紀中葉	斜位	A I	センターI (1991)	
156	89-3	第9面	大畦畔6盛土中	土師器皿A (完形ではない)	2点	10世紀中葉		A I	センターI (1991)	
157	89-3	第11-1面	溝60	黒色土器A類碗 (2/5) (打欠2カ所)	1点	10世紀前半	横位		センターI (1991)	「人為的な打ち欠きの可能性」
158	89-3	第11-1面	土坑32	土師器杯A (ほぼ完形)	1点	10世紀代	底面・正置	AHb	センターI (1991)	「口縁一部打欠」
159	89-3	第11-1面	ビット218	黒色土器A類碗 (ほぼ完形)	1点	10世紀前半	底面・正置	AHb	センターI (1991)	
160	90-1 (90-92)	第14面		馬下頸付	1点	10世紀後半から中葉	横位		センターXII (1991)	
161	90-1 (90-92)	第14面	坪境畦畔上Pr (坪境36)	黒色土器B類碗 (ほぼ完形)	1点	11世紀中頃	ほぼ正位	AHb	センターXII (1995)	第14面置石有
162	90-1 (90-92)	第16-2面	土器埋納遺構13	土師器杯C (完形)	1点	10世紀代	底面・ほぼ正置	AHb	センターXII (1995)	
163	90-2 (H 2)	第11面 (洪水砂) 上面	調査区北東部分凹み	黒色土器碗A類 (ほぼ完形)	1点	平安時代	正置か	AHb	センターIII (1991)	「第11面が少し凹んだところから出土しているものの遺構は確認できなかった」
164	90-2 (H 3)	第13-1面か		黒色土器A類碗 (3/4)、モモの種6、土師器杯D (1/3)	2点他	平安時代	重ねて、正置 モモは黒色土器内	AHb	センターVI (1991)	
165	90-3 (90)	第11面か	土器埋納ビット1	土師器杯A (完形)	1点	10世紀代	底面・正置	AHb	センターII (1991)	「「ヤ」の字状の墨書」
166	90-3 (90)	第11面か	土器埋納ビット2	土師器杯D	1点	10世紀	底面・正置	AHb	センターII (1991)	
167	90-3 (90)	第11面か	土器埋納ビット5	土師器杯A (完形)	1点	10世紀	底面・正置	AHb	センターII (1991)	
168	90-3 (91)	第11面	土器埋納遺構1	土師器杯D (ほぼ完形か)	1点	10世紀前半	底面・正置	AHb	センターVII (1992)	
169	90-3 (91)	第11面	土器埋納遺構2	土師器杯A (ほぼ完形)	1点	10世紀前半	底面・正置	AHb	センターVII (1992)	「口縁一部打欠・見込み部分焼成後緑刻」
170	90-3 (92)	第11 (a) 下層	坪境交差点	木柱 (先端破断部、桶)	2点	10世紀中葉	正置		センターX I (1995)	「木柱 (一部火を受け炭化)、桶の脚十かの土器埋納遺構は少数」
171	92-6		土器埋納ビット1	黒色土器碗 (ほぼ完形)	1点	平安時代	中位・正位	AHb	本報告	「口縁一部打欠か、江浦 [1996] より」
172	92-6	穴①		土師器杯C (完形)	1点	平安時代	底面・正位	AHb	本報告	江浦 [1996] より
173	92-7	第13面	銅鈴ビット	銅鈴 (完形)	1点	平安時代			未報告	江浦 [1996] より
174	92-7		P183	土師器碗C (残存?)	1点	平安時代	中位・正位	AHb	未報告	江浦 [1996] より
175	92-7		P282	土師器杯D (残存?)	1点	平安時代	中位・正位	AHb	未報告	江浦 [1996] より

No.	調査区	報告時遺構面	報告時遺構名	埋納遺物	出土点数	時期	埋納状態	埋納箇所	経緯 No.	備考 (報告者の埋納遺構判断材料など)
176 02-7			P283	黒色土器碗 (完形か)	1点	平安時代	中位・逆位	A11b	未報告	「高台部全面打欠」、江浦 [1996] より
177 02-7			土師器納ビット a	土師器杯 C (残存?)	1点	平安時代	底面・正位	A11b	未報告	「口縁一部打欠、底面に墨書有」、江浦 [1996] より
178 03-1		第8面か	土師器納遺構 3	土師器皿 A (完形)	1点	10世紀後半	底面・正置	A11b	大文研 XV (1997)	「作上下面検出」
179 03-1		第8面か	土師器納遺構 4	土師器杯 C (ほぼ完形)	1点	10世紀前半	正置	A11b	大文研 XV (1997)	「口縁一部打欠、墨書が認められる」
180 03-1		第8面か	土師器皿 A (6割残存)	土師器皿 A (6割残存)	1点	10～11世紀		A11b	大文研 XV (1997)	「土器埋納遺構の可能性も否定できない」
181 03-1		1-2層洪水砂最下部		銅鈴 (完形)	1点	平安時代			未報告	
182 06-2		第8面		銅鈴 (完形)	1点	平安時代	逆斜位		大文研 X・XIII (1997)	
183 06-1		第6面	ビット6004	瓦器碗 (完形)	1点	13世紀中葉	中位・正置	A11b	府教委III (1988)	
184 06-1		第6面	土坑6011	瓦器碗 (完形)	1点	13世紀初頭	底面・横位	A11b	府教委III (1988)	炭化物付着 (0.5面)
185 06-1		第6面	土坑6026	瓦器碗 (ほぼ完形)	1点	13末から14世紀初頭	底面・正置	A11b	府教委III (1988)	
186 09-2 (H 4)		第11面	溝154	獸骨、土器、自然石、木製品		12世紀中頃			センター X (1995)	「ウシが多く、また複数頭」
187 09-2 (H 3)		第11面か		瓦器碗 (2/3)	1点	12世紀中頃		A11b	センター VI (1991)	「破断面が新しく完形のまゝ上面から埋められた可能性」
188 09-3 (92)		第9面	獸骨埋納土坑 1	牛の下顎骨他		12世紀代	中位・横位		センター X I (1995)	
189 09-3 (92)		第9面	獸骨埋納土坑 2	牛頭骨		12世紀代	中位・逆置		センター X I (1995)	
190 09-3 (92)		第9-2面	坪境水路	獸骨・瓦器・土師器・須恵器細片		12世紀中葉			センター X I (1995)	
191 02-7			瓦器ビット 1	瓦器碗 (ほぼ完形か)	1点	13世紀中葉	底面・正位	A11b	未報告	江浦 [1996] より
192 02-7			瓦器ビット 2	瓦器碗 (ほぼ完形か)	1点	12世紀初頭	底面・正位	A11b	未報告	「口縁一部打欠か、江浦 [1996] より」
193 02-7			瓦器ビット 3	瓦器碗 (完形か)	1点	12世紀初頭	底面・正位	A11b	未報告	江浦 [1996] より
194 02-7			瓦器ビット 4	黒色土器碗 (残存?)	1点	11世紀後半	底面・正位	A11b	未報告	江浦 [1996] より
195 02-7			瓦器ビット?	瓦器碗 (完形)	1点	12世紀後半		A11b	未報告	江浦 [1996] より
196 03-1		第3面か	土師器納遺構 1	土師器皿 (残存?) + 多量のウリ科植物の種子	1点他	中世		A11b	大文研 XV (1997)	
197 03-1		第6面	坪境27溝	獸骨		13初頭～14世紀?			大文研 XV (1997)	「動物犠牲の農耕儀礼に関する遺物・・・この馬の骨も同様の性格」
198 03-1		第7面	土坑10 (坪境交差点の水路底)	-		11後半～12世紀		C1	大文研 XV (1997)	「脂防酸分析→人の埋葬か」 cf. 90-3
199 03-1		第7面	坪境30溝	土器各種、木製品、馬歯肉、獸骨 (ウマ・ウシ・スッポン・シカ・イシガメなど)		11後半～12世紀			大文研 XV (1997)	
200 03-2		中世7面	B区第10面溝25 D区第8面溝65	土師器、瓦器、黒色土器、須恵器、獸骨、歯、棧核、木等		11末葉～12世紀前半			大文研 XVI (1995)	
201 09-2		第5面	坪境畦畔土坑	木瓶 (完形)	1点	近世	中位・横位	A11b	センター I (1991)	(1999年12月段階までの公表資料による)

センター：朝大版文化財センター

【凡例】府教委：大阪府教育委員会
大文研：朝大版府文化財調査研究センター

表4 池島・福万寺遺跡出土銭貨一覧表

No.	調査区	報告時遺構面	報告時遺構名	埋納遺物	出土点数	初期時期	埋納状態	概要No.	備考
1 89-1	第1面			一銭銅貨	1	明治8年		センターⅠ(1991)	
2 89-1	第1面			二銭銅貨	1	明治13年		センターⅠ(1991)	
3 89-2	第1面		畦畔盛土中	寛永通寶	1	1668～		センターⅠ(1991)	
4 90-1(90-92)	第14面			富寿神寶(皇朝十二銭)	1	818～		センターⅣ(1991)	
5 90-1(90-92)	第5面か			天聖元寶(北宋銭)	1	1023～		センターⅤⅡ(1995)	残存1/3
6 90-1(90-92)	第6面か			祥符元寶(北宋銭)	1	1009～		センターⅤⅡ(1995)	残存1/4
7 90-1(90-92)	第14面か			神功開寶(皇朝十二銭)	1	765～		センターⅤⅡ(1995)	
8 90-1(90-92)	第14面か			富寿神寶(皇朝十二銭)	1	818～		センターⅤⅢ(1991)	
9 90-2(H2)	第9面		島畑18北辺裾部耕土内	元祐通寶(北宋銭)	1	1086～		センターⅤⅢ(1991)	
10 90-2(H3)	第6面か			天聖元寶(北宋銭)	1	1023～		センターⅤⅢ(1991)	
11 90-2(H4)	第2面か			寛永通寶	1	1636～		センターⅤⅢ(1991)	
12 90-2(H2・3・4)	第5面か			寛永通寶	1	1636～		センターⅤⅢ(1991)	
13 90-2(H2・3・4)	第7面			洪武通寶(明銭)	1	1368～		センターⅤⅢ(1991)	
14 90-2(H2・3・4)	第7面か			景祐元寶(北宋銭)	1	1034～		センターⅤⅢ(1991)	
15 90-3	第4面			政和通寶	1	1111～		センターⅤⅢ(1991)	
16 90-3	第11面		八ノ坪か	乾元大寶(皇朝十二銭)	2	958～	2枚重なる、水平(表)	センターⅤⅢ(1991)	
17 90-3	第11面		八ノ坪か	富寿神寶(皇朝十二銭)	1	818～		センターⅤⅢ(1991)	
18 90-3	第5面		島畑6の盛土内	洪武通寶(明銭)	1	1368～		センターⅤⅢ(1991)	
19 90-5	第1面		溝1	50銭貨銅貨	1	昭和21年		センターⅤⅢ(1991)	
20 90-5	第7面		溝74北側下端	開元通寶(唐銭)	1	621～	密集する16枚の1枚・垂直	センターⅤⅢ(1991)	袋に入った状態か、意図的に埋蔵
21 90-5	第7面		溝74北側下端	至道元寶(北宋銭)	1	995～	密集する16枚の1枚・斜め	センターⅤⅢ(1991)	袋に入った状態か、意図的に埋蔵
22 90-5	第7面		溝74北側下端	景德元寶(北宋銭)	1	1004～	密集する16枚の1枚・水平(裏)	センターⅤⅢ(1991)	袋に入った状態か、意図的に埋蔵
23 90-5	第7面		溝74北側下端	祥符元寶(北宋銭)	1	1009～	密集する16枚の東・水平(表)	センターⅤⅢ(1991)	袋に入った状態か、意図的に埋蔵
24 90-5	第7面		溝74北側下端	天聖元寶(北宋銭)	2	1023～	密集する16枚の1枚・西・水平(表)	センターⅤⅢ(1991)	袋に入った状態か、意図的に埋蔵
25 90-5	第7面		溝74北側下端	景祐元寶(北宋銭)	1	1034～	密集する16枚の1枚・水平(裏)	センターⅤⅢ(1991)	袋に入った状態か、意図的に埋蔵
26 90-5	第7面		溝74北側下端	皇和通寶(北宋銭)	1	1038～	密集する16枚の1枚・斜め	センターⅤⅢ(1991)	袋に入った状態か、意図的に埋蔵
27 90-5	第7面		溝74北側下端	至道元寶(北宋銭)	1	1054～	密集する16枚の西・水平(裏)	センターⅤⅢ(1991)	袋に入った状態か、意図的に埋蔵
28 90-5	第7面		溝74北側下端	嘉祐通寶(北宋銭)	1	1056～	密集する16枚の1枚・垂直	センターⅤⅢ(1991)	袋に入った状態か、意図的に埋蔵
29 90-5	第7面		溝74北側下端	嘉祐通寶(北宋銭)	1	1056～	密集する16枚の1枚・水平(裏)	センターⅤⅢ(1991)	袋に入った状態か、意図的に埋蔵
30 90-5	第7面		溝74北側下端	熙寧元寶(北宋銭)	2	1068～	密集する16枚の1枚・水平(表)	センターⅤⅢ(1991)	袋に入った状態か、意図的に埋蔵
31 90-5	第7面		溝74北側下端	元豐通寶(北宋銭)	3	1078～	密集する16枚の3枚・水平(表)、西2・水平(表・裏)	センターⅤⅢ(1991)	袋に入った状態か、意図的に埋蔵
32 90-5	第7面		溝74北側下端	元祐通寶(北宋銭)	2	1086～	密集する16枚の2枚・垂直、水平(裏)	センターⅤⅢ(1991)	袋に入った状態か、意図的に埋蔵
33 90-5	第7面		溝74北側下端	聖宗元寶(北宋銭)	2	1101～	密集する16枚の2枚・斜め、水平(裏か)	センターⅤⅢ(1991)	袋に入った状態か、意図的に埋蔵
34 90-5	第7面		溝74北側下端	大觀通寶(北宋銭)	1	1107～	密集する16枚の1枚・水平(表)	センターⅤⅢ(1991)	袋に入った状態か、意図的に埋蔵
35 90-5	第7面		溝74北側下端	宣和通寶(北宋銭)	1	1119～	密集する16枚の1枚・垂直	センターⅤⅢ(1991)	袋に入った状態か、意図的に埋蔵
36 90-5	第7面		溝74北側下端	嘉定通寶(南宋銭)	2	1208～	密集する16枚の2枚・水平(表)	センターⅤⅢ(1991)	袋に入った状態か、意図的に埋蔵
37 93-1	第2面か			祥符元寶(北宋銭)	1	1009～		センターⅤⅢ(1991)	
38 93-1	第6面		四ノ坪南西部	祥符元寶(北宋銭)	1	1009～		センターⅤⅢ(1991)	
39 95-1	第2-1a面か			元豐通寶(北宋銭)	1	1078～		センターⅤⅢ(1991)	
40 95-1	第3-1a面か			元祐通寶(北宋銭)	1	1086～		センターⅤⅢ(1991)	
41 95-1	第3-1a面か			治平元寶(北宋銭)	1	1064～		センターⅤⅢ(1991)	
42 95-1	第8a面			和同開珎(皇朝十二銭)	1	708～		センターⅤⅢ(1991)	
43 96-2	第1面か			貨幣模造品(一分銀)	1	江戸時代		センターⅤⅢ(1991)	
44 96-2	第1面か			貨幣模造品(文政丁銀か元文丁銀)	1	江戸時代		センターⅤⅢ(1991)	
45 96-2	第5面か			元豐通寶(北宋銭)	1	1078～		センターⅤⅢ(1991)	模造銭の可能性有り
46 八尾市90			SD11	天聖通寶(北宋銭)	1			センターⅤⅢ(1991)	
47 八尾市90				熙寧元寶(北宋銭)	1	1068～		センターⅤⅢ(1991)	
48 八尾市90				皇宋通寶(北宋銭)	1	1038～		センターⅤⅢ(1991)	

(概要No.は当遺跡の概要報告でのNo.)

(1999年12月段階までの公表資料による)

センター：柳井文化財センター
八尾市：柳井文化財調査研究センター【凡例】府教委：大阪府教育委員会
大文研：柳井文化財調査研究センター